

《戦国武田氏三代目・武田勝頼》

-その生涯・器量 そして「勝頼伝説」-

【生涯】

- 誕生**：天文十五年(1546)誕生。月日・生誕地は不明。父・武田信玄、生母・諏訪頼重の娘、法名は乾福寺殿(けんぷくじでん)。
諱(いみな)に武田氏の通字「信」でなく諏訪氏の通字「頼」が入っている。
信玄の息子；太郎義信、次郎信親(龍宝)、三郎信之、四郎勝頼、五郎盛信(仁科五郎)、十郎信貞(葛山)、信清(安田)。
乾福寺殿；諏訪(諏方)頼重側室麻績氏。通称「諏訪御寮(料)人=諏訪家の娘」
『甲陽軍艦』(以下軍艦)によれば、“かくれなきびじん”と。
新田次郎「武田信玄」湖衣姫。井上靖「風林火山」由布姫。墓は高遠城下「建福寺」にあると言われている。武田氏支配の頃は、「乾福寺」と称した。戒名=乾福寺院殿梅巖妙香大禅定尼→「梅姫？」(井沢元彦説) 死去：弘治元年(1555)十一月。勝頼 10 歳。輿入れについて
『軍艦』は、信玄宿老板垣信方・甘利虎泰らは、反対。山本勘助は、側室に迎えることを進言。≒仕官間もない勘助が言える立場か？。
- 高遠城入城(17 歳)**：永禄五年(1562)六月 諏訪氏一族の高遠諏訪氏家督・諏訪氏惣領職を継ぎ、高遠城に入る。「諏訪四郎神勝頼」と称す。父信玄を支える「武田御一門衆」の一人で、兄義信に次ぐ地位を得るが、①諏訪氏の本家の家督相続でない。②信玄の家臣の一人にすぎず、伊那四郎=「諏訪の人」と認識されていた。
- 信玄と嫡男義信との対立・謀反(20 歳)**：永禄八年十月(1565)兄義信の謀反が発覚。山県昌景の密告。昌景兄飯富寅昌を処断。義信妻=今川氏真の妹、母三条夫人=今川氏の仲介で輿入れ。今川派の巨頭。義信は、2 年後永禄十年(1567)幽閉先の東光寺で死去(30 歳)。「利根すぎたる=小賢しい驕りたかい人(軍艦)」と評されている。
- 結婚(20 歳)**：同年十一月 織田信長の養女龍勝寺殿(遠山直廉娘≒美濃の国衆。武田氏及び織田氏の両属。≒織田氏と武田氏間の軍事衝突回避)。
- 嫡男武王丸(後の信勝)誕生(22 歳)**：永禄十年(1567)十一月。生母龍勝寺殿。
元亀 2 年(1571) 龍勝寺殿死亡。死亡後、武田(松姫)・織田(信忠)の婚姻関係再構築へ。

6. **生母乾福寺殿の供養**：永禄十二年七月(24歳)。高野山・成慶院で生母乾福寺殿追善供養(檀徒契約は永禄十一年)。
7. **武田復姓(25歳)**：永禄十三年(元亀元年)(1570)頃、甲府入り(元亀二年説も)。武田姓に復歸。信玄の後継者=武田勝頼として隣国との外交交渉に登場する。「諏訪勝頼」と名乗ったのはわずか2年間。
8. **信玄“西上作戦(せいじょう)”開始(27歳)**：元亀三年(1572)十月頃。同年十二月“三方ヶ原の戦い”で家康に大勝。勝頼も参陣し、武田家の嫡子として周知された。
徳川領侵攻の目的；①信長を破り天下人を目指す説 ②遠江・三河・美濃への領国拡大説との両論ある。②の説が有力。
武田氏と織田氏の対立へ；同盟(信玄息女松姫と信長嫡男信忠との縁談等)関係から対立へ。
9. **信玄死去(28歳)**：元亀四年(1573)三月、信玄病状悪化。西上作戦を中止。信濃への撤退を開始。同年四月信濃伊那郡南端で死去。信玄享年53歳。勝頼が家督相続。
- 信玄の遺言(『軍艦』によれば)；①死を三年秘す(弟信廉を影武者に) ②勝頼は陣代・信勝が家督相続(後継者は孫の信勝、16歳で家督相続、それまで勝頼は陣代。信勝はこの時7歳) ③当面の軍事・外交方針、則ち謙信との和睦、他大名の死去を待てと。
10. **遠江・高天神城攻略(29歳)**：天正二年六月(1574)。高天神城(静岡県掛川市)は、遠江国の要衝地=太平洋につながる海上軍事拠点。信玄が落とせなかった城を、勝頼攻略した。これで勝頼は、自信を深めた。
信長の評価：「勝頼若輩ながら、油断できない」と書状を謙信に送っている。
11. **三河・長篠の戦い(30歳)**：天正三年(1575)。
・3月末、徳川領へ侵攻開始。
・4月末、家康の吉田城攻略、同城を焼き討ち。
・5月始、三河長篠城を包囲、奪還戦を開始。信長の家康への援軍・岡崎城へ。
・5月中旬、三河・設楽原で、織田・徳川連合軍に大敗。多くの武将(宿老)を失う。
・5月下旬、織田・徳川連合軍の反撃本格化、駿府も失う。
・6月末迄、武田氏は、三河の領国をすべて失う。
12. **桂林院殿(北条氏政妹)正室に(31歳)**：天正四年(1576)の年→甲相同盟の強化。
13. **御館の乱(33歳)**：天正六年(1578)三月謙信急逝。五月上杉家の家督相続争い(

養子景勝(甥 姉の子)と養子景虎(北条氏政の弟)勃発。

- ・ 同月氏政は、景虎支援を勝頼に依頼。八月勝頼の調停により和睦するも、すぐ破綻。
- ・ 当初勝頼は、景虎支援の行動をとるが、心変わりし景勝を助ける。
- ・ 天正七年四月(1579)、景虎自害。乱終わる。
- ・ 同年9月(1579)、氏政は、勝頼の違約を非難し、「甲相同盟)破棄→武田・北条の対立へ。氏康は家康と同盟「相遠同盟」を結ぶ。

14. 菊姫(妹)景勝に輿入れ(34歳)：天正七年十二月(1579)祝言。「甲越同盟」が明確に。

15. 領国の最拡大(33～35歳)：この頃勝頼の支配する領国は、最大となり信玄の時代より拡大した。
→参考資料ご参照。

16. 新府城落成(36歳)：天正九年(1581)九月、新府城落成を周知。十二月移転開始。
一方、この月織田信長が、「年明けの武田攻め」を通達。

17. 武田氏滅亡(37歳)：天正十年(1582)一月～三月。

- ・ 一月二十七日 木曾義昌謀反
- ・ 二月六日 織田家臣河尻秀隆信濃侵入、二月十六日 織田信忠信濃伊那郡侵入。
- ・ 二月二十日 勝頼、景勝に援軍派遣要請。
- ・ 二月二十五日 御一門衆穴山信君(梅雪)謀反
- ・ 二月二十六日 北条氏、駿河侵攻開始
- ・ 三月二日 織田信忠、高遠城攻略。仁科信盛(弟・信玄五男)討死。
- ・ 三月三日 勝頼、新府城に火を放ち、岩殿城(小山田信茂)をめざす。
- ・ 三月五日 織田信長、安土から出陣。
- ・ 三月七日 織田信忠、甲府で武田氏一門・重臣の処刑。
- ・ 三月十日 小山田信茂、勝頼から謀反。
- ・ 三月十一日 織田軍滝川一益の攻撃を受け、天目山麓・田野にて、勝頼・信勝・桂林院殿が自害。→戦国大名武田氏は、滅亡。<三月十四日 信長信濃飯田で首検分、三月二十二日 京で晒される>

【器量】

1. 「不運」

①中継：誕生から信玄の後継者でなかったこと。即ち信玄は、後継者は長男義信と決めていた。義信が後継者の地位にいたときは、勝頼は「家臣」の地位となる。信玄の宿老達は、勝頼は若輩の「同僚」とみていた。勝頼が、武田に復姓し、「主人」になっても、宿老から見れば、勝頼の出生の状況を見ても、「主人」と認めがたい気持

ちがあった。信玄が、もう少し長生きし勝頼を後見していたらと思われる。

②陣代：信玄は遺言で、「勝頼は陣代、孫信勝が16歳になったら家督を相続せよ」と遺言(軍艦)。この遺言は、一門衆・宿老が集まる前でなされたと言う。つまり、勝頼は、「中継ぎ」と名指しされたことになる。勝頼のプライド・権威は大きく損なわれた。つまり、勝頼の新当主としての地位は不安定であったと想像される。

③旗印：信玄遺言には、「孫子の旗以下、信玄の旗印を使ってはならない」という遺言もある(軍艦)。信玄家臣達が、新当主勝頼を軽視する動機付けとなる。信玄の遺言は、「信玄の誤判断、若しくは失敗」と言えよう。

2. 「慢心」:

①高天神城攻略:天正二年(1574)5月高天神城包囲、6月攻略。家督相続後約1年後。この城は山の上であり守りの堅い城と言われ、又遠江の要衝地であり、家康の最前線基地であった。

②信玄も落とすことのできなかつたこの城の攻略成功により、勝頼は自信をつけたが、逆に、父信玄を超えたと「慢心」に陥ったと想像される。

③この慢心に浸る勝頼は、翌年天正三年「長篠の戦い」大敗。この戦が、「武田家滅亡」の遠因となったと思われる。

3. 「変心」:

①天正六年三月、上杉謙信急逝。跡継ぎは上杉景勝(甥・姉の子・養子)に決まっていた。しかし謙信は北条氏から迎えた養子景虎(北条氏政の実弟)を一時後継者と決めたことがあった(天正三年)。景勝の反対派が景虎を擁立。領国を二分する御家騒動=「御館の乱」の勃発である。

②勝頼は、長篠敗戦後、信玄以来断交していた、北条家と同盟(甲相同盟)を結び、氏政の妹を後妻に迎え、勝頼と景虎は義兄弟となる。

③北条氏政は、「弟景虎を助けてやってくれ」と勝頼に申出。勝頼は、始めは氏政の要請を受け、景虎へ援軍を出すつもりであった。景虎へ援軍をだせば、「上杉・武田・北条」の大同盟の成立可能性もあったが、しかし勝頼は「変心」し、景勝を助けた。景虎は、敗れ自害に。氏政は激怒「武田・北条同盟(甲相同盟)」は崩壊した。天正十年、北条氏は、「織田・徳川・北条連合軍」の結成となり、武田氏滅亡への道を加速させた。

④勝頼の外交上の失敗である。何故変心したかの理由として、(1)金一万両受取説(2)「勝頼の家臣になるという景勝の一言説(3)上野国の東半分を差出す説がある。

4. 器量(資質)・評価:

勝頼の器量・資質を、どう見るかは、今回の発表では、差し控えたい。

研究・勉強不足。

→参考資料ご参照。

【伝説】

1. **定説**：天正十年(1582)三月三日早朝、新府城に火を放ち、郡内(現在の太月市近辺)へ退避を開始。三月十一日小山田信茂の寝返りにより、天目山(天目山は、棲雲寺のある地域一帯の通称)山麓の田野・景德院で妻と息子・信勝と共に自刃した。

・勝頼 37 歳、信勝 15 歳、妻(継母・北条夫人)19 歳。(数え年) →自刃説。

・『甲陽軍艦』では、勝頼は最後まで戦い、戦死したと書かれている。又勝頼を討ったのは、伊藤伊右衛門永光という人であると言われている。 →戦死説。

2. **影武者**：後世になり、自害したのは、「勝頼の影武者」で、勝頼親子は、家臣数名とともに田野から逃げ延び、上野国利根郷(沼田領・現在の群馬県利根郡地方)に身を隠した。

この時、勝頼は信玄から相続した“甲州金(基石金)„を、逃亡(再起)資金として多量に持ち出したと言う。

3. **土佐**：その後、甲斐国武田氏一族の流れをくむ香宗我部氏を頼って、土佐・大崎村川井(現在の高知県吾川郡仁淀川町)へ逃れた。天正十二年(1584)二月と言われている。田野の戦いから約 2 年後となる。

武田氏一族；香宗我部(こうそがべ)氏は、土佐国生え抜きの武士ではなく、香宗我部氏の祖香宗我部秋家(あきいえ)は、甲斐源氏的一条忠頼(4代武田信義の長男・5代目で一条二郎)の家人で、忠頼没落後、源頼朝に仕官(『吾妻鏡』)し、建久四年(1193)土佐国・宗我部及深淵両郷(高知県野市町)の地頭職に任命されたと言う。(香宗我部家伝承文) “香”は、土佐国・香美郡の香。

秋家が、土佐に入部したのはいつか、どこかは不明であるが、鎌倉時代初期に入部とみられ、鎌倉後期頃には、“香宗我部„を名乗っていたのではないか。13世紀頃には、香美郡に「香宗我部保」(保とは荘園の別名)が存在したと言う。

4. **名前**：土佐では、名前を「大崎玄蕃」と名乗り、社寺を建立した。川井神社(現在・大崎八幡宮)、成福寺(じょうふくじ)。同寺には、勝頼の子・正晴の墓が現存すると言う。

5. **根拠**：(1)大崎八幡宮には、高野山に所蔵されている武田勝頼の肖像画に描かれている「紋所」と同じ「武田菱家紋」入りの手鏡が奉納されており、(2)仁淀川町に伝わる「武田家の系図」には、大崎玄蕃=武田勝頼は、慶長十四年(1609)八月、64歳で死亡している。息子武田信勝は「大崎吾郎」と名乗りこの地で没したと言う。

肖像画(高野山持明院蔵)

→参考資料ご参照。

勝頼自害後、勝頼の遺言により、四月十五日高野山弘導院(現持明院)で供養。

その時「勝頼・桂林院殿・信勝の寿像(生前像)」等が奉納された。勝頼の着物の「紋所」に注目して下さい。

6. 結 論 :

この伝説・伝承を、“信じるか否かは、あなた次第”。

歴史的事実・正確な資料により「歴史」を学ぶことは、基本且つ大切であるが、各地の存在する「伝承・伝説」を、知り学ぶことも楽しいことである。

《参考資料》

- | | | |
|-------------------------|-------|----------|
| ○「山梨県の歴史」 | | 山川出版社 |
| ○「高知県の歴史」 | | 山川出版社 |
| ○「穴山武田氏」 | 平山 優 | 戎光出版 |
| ○「武田氏滅亡」 | 平山 優 | 角川選書 |
| ○「武田勝頼」 | 丸島和洋 | 平凡社 |
| ○「戦国武将の実力 111 人の通信簿」 | 小和田哲男 | 中公新書 |
| ○「英傑の日本史 風林火山編」 | 井沢元彦 | 角川文庫 |
| ○「誰も書かなかった日本史〈その後〉の謎大全」 | | KADOKAWA |

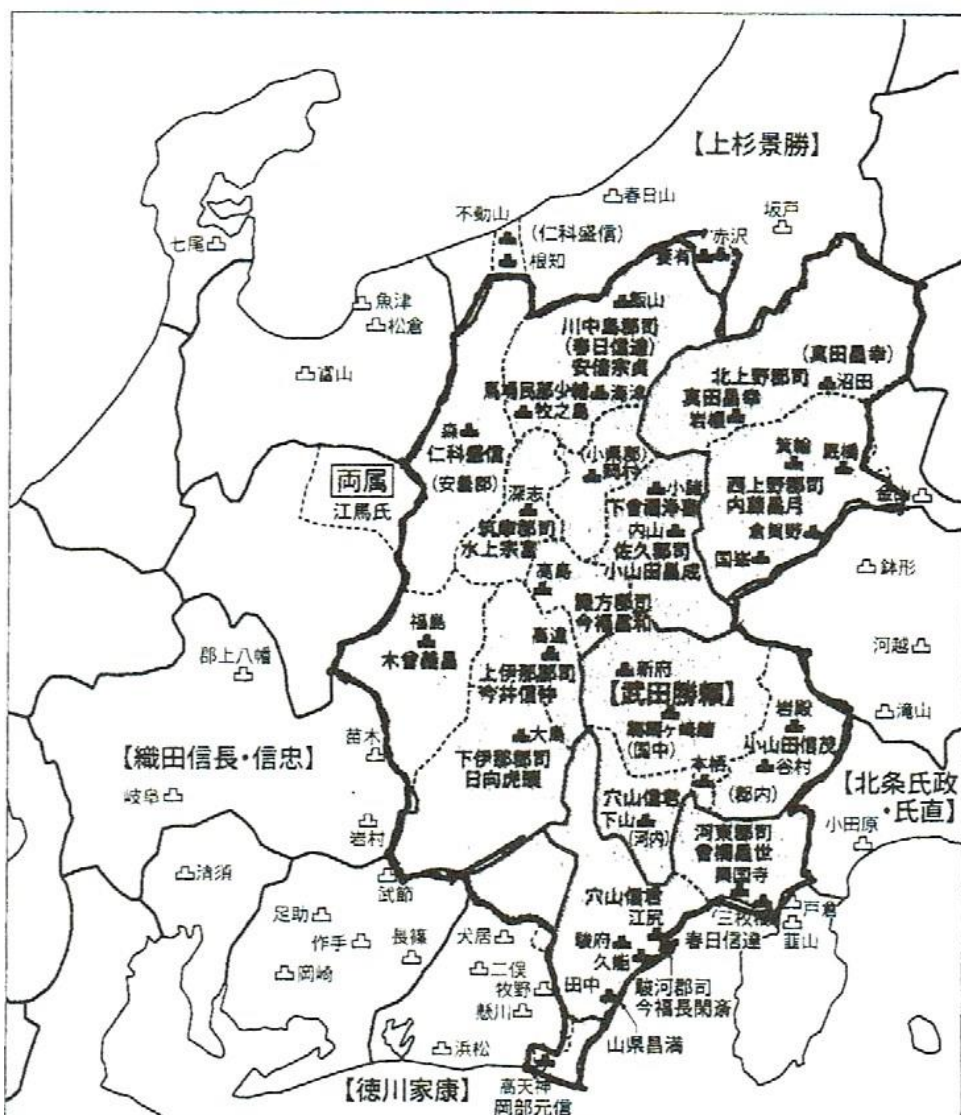
《参考論文》

- 「現人神の諏訪頼重と武田四郎勝頼」
高野賢彦氏(当会会員) 「歴研よこはま・第71号・H26/11」

《参考資料》

武田領国図

天正7,8年頃の「武田氏支配の領国図」。
勝頼支配の地域は、信玄の時より拡大された。



出典：「武田勝頼」 丸島和洋 平凡社

《参考資料》

勝頼・桂林院殿・信勝像

勝頼は、遺言で高野山引導院(現持明院)での供養を依頼していた。天正10年4月15日付で、「勝頼・桂林院殿・信勝の寿像(生前像)」等が奉納された。

「寿像」は天正4年～7年頃に描かれ、戦国大名の「家族像」は珍しい。家族の睦まじさが伺える。



勝頼・桂林院殿・信勝像 高野山持明院蔵